
暗い微笑

まったりorz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗い微笑

【Nコード】

N9864B

【作者名】

まったりorz

【あらすじ】

愛をくれぬ母と暗い日常の中で、小説を書き続けていた恵美は、コンテストで佳作をもらった事をきっかけに、美しい少女、知可と仲良くなる。知可と励まし合いながら、執筆を続けていくのだが…

…

前編

「毎朝、眩しい朝日で目を覚ますと、お母さんとお父さんが、焼きたてのトーストの香ばしい匂いの中で、笑いながら次の旅行の行き先を話し合っている。遊園地なんてどうだろう？この前いったばかりじゃないの、次は××高原がいいわ、恵美が羊を見たいって言うってたもの。そうか、じゃあそうしよう。私は二人の会話に、どこかくすぐったいような嬉しさを感じながら、おはよう、お母さんお父さん、と言うのだ。」

【暗い微笑】

恵美は、一人の薄暗い部屋の中、溜め息をついた。興奮が冷めるのと同時に、じわりと涙が浮かぶ。ノートに書きなぐられた薄っぺらい理想に、少し慰められたからだ。

いつからだろう、恵美は、母親との仲がこじれる度に、こうして温かい理想の家庭を紙の上に作っては、そこに自分の姿を置き、自分を慰めるようになっていた。父親の多額の借金を理由に離婚した母と二人で暮らすようになってもう十年経つ。

雀の涙ほどの生活保護のお金を、母親はお酒に費やすようになった。勉強の出来た恵美の進学を助けてくれたのは、その母親の両親、祖父母だった。とはいえ祖父母は、本当の意味で恵美を救わなかった。恵美が酔った母親に暴力を受けているのを知りながら、それでも実の娘が可愛いのか、実家に帰るのを拒む母から恵美を取りあげる事はしなかった。

つまり恵美は、母親の生活を支える役割を担わされているのだ。恵美は毎日、酒を飲む以外何もしようとしない母の代わりに、全ての家事をしながら、また母の鬱憤晴らしに使われながら、一番に自

分の事を考えてくれる人間はいないのだ、と悟った。そして、その寂しさを、自分で書いた物語によって紛らわしていた。

恵美の通う高校は、県内でも有数の進学校だ。恵美は、自分是一人で何とか生きていかなければいけない事を知っていたので、よく勉強した。奨学金を貰い、県外の大学へ進学し、母と離れたいというのもあったが。

内気な恵美には友達がいなかった。また恵美は、高校に通う大抵のクラスメイトが、裕福な家庭で、親が医者だったり、大学教授だったり、企業でそれなりの地位についていたりするのが殆どで、劣等感にも似た気持ちから、自分の寂しい事情を理解してくれる人はいないだろう、と思ってもいた。恵美はハツラツときらめかんばかりの級友の笑顔を見るたび、一抹の影を暗い目にためたまま寂しく微笑した。

その高校には、毎年二回のある行事があった。県内でトップ10の高校合同で開催される文芸コンテストだ。募集要項は、自作の文芸作品、または小論文で、大賞が一作品と優秀賞、佳作を合わせて五作品が入選する。入選すれば新聞での紹介と学校での表彰が行われる。高校同士の競争もあって、それぞれの高校が、このコンテストに力を入れていた。また、内申書の事もあって、生徒のほとんどがコンテストに参加し、慣れない文章を書いた。

恵美もまたコンテストに情熱を燃やす一人だった。五月のコンテストで、佳作をもらってから、いよいよその熱は高まった。次の募集締め切りは九月だ。七月に佳作の表彰を受けてから、実は恵美に一人の友達が出来た。一緒に佳作に入選した白水知可である。恵美と彼女はクラスメイトから羨望の眼差しと、教師からの期待を一身に受けた。

「嫌ねえ。プレッシャー感じちゃう。私まだ全然新しい小説書いてないのに」

満更でもない、といった顔で知可は恵美の肩を叩く。知可は全てにおいて恵まれていた少女だった。夏服の白いセーラーからは、すらりとした腕が伸び、傷ひとつない華奢な足もまた真っ白なソックスに包まれている。匂いたつ髪は光を浴び美しく流れ、長い睫と色濃い唇、派手な雰囲気顔立ち、均整がとれ美しかった。知可は、強引で少し我儘な所もあったが、その美しい容姿のおかげで、大抵の事は好意的にとられていた。知可自身、自分の我儘が、当然のごとく受け入れられるものと認識していた。

「先生、コンテストに向けて朝の課外は読書の時間にして欲しいの。いいでしょう？このクラスは、二人も佳作をとったんですよ」

知可がそう提案した時も、国語教師はあっさりと週に一度ある現国の課外授業を、コンテストの創作時間にあてる事にしてしまった。それには、さすがに恵美も驚いたが、家に帰ってはコンテスト用の小説を執筆する時間が限られているので、助かった。

「どう？順調？」

休み時間に恵美が机に向かって、ペンを悪戯に弄んでいると知可が声をかける。

「全然。何を書いていいのか、わからなくなっちゃって」

恵美は突然美しい少女に話しかけられた事にどぎまぎしながら、苦笑した。実際、今までは自分のためだけに小説を書いていたのが、

急に佳作を貰った事で、注目され、次の入賞のため、学校の期待に答えるため、何を書くのがいいのか考えあぐねていた。

「好きな事を書けばいいのよ。そうすればきつと良いものが出来るわ。お互い頑張りましょう。」

知可は優しく微笑んで、恵美の髪を撫でた。知可が皆に嫌われず、持てはやされるのはきつとこの優しい笑顔、どこか姉御肌の強気な態度に包容力に似た優しさを持たせるそれがあるからだ、と恵美は思う。

知可は、事実、大人しくて孤立しがちな恵美を積極的にクラスの輪へと誘った。昼ご飯の時、体育のチーム決めの時、何という事はない自習時間の談笑の時。どこか陰気な影を持つ恵美の雰囲気は、隣に知可の居るとき、美しい花を添えたように、ぱつと華やいた。恵美は、始めて自分の存在が皆に認識されたようで嬉しかった。そして、目の前にいる美しい少女が、優しい目で、自分を見てくれる事が、何よりも恵美を幸せにした。

自分は、誰からも見放された寂しい存在だと今までずっと思っていたのだから。

幸せを噛み締めながら時間が過ぎ、いよいよコンテストの締め切りまで一ヶ月を切った。周りは、近づく締め切りに向け、皆がどんな話を書いているのかの詮索や、自分の作品の出来栄えの話でざわめいている。恵美は、静かに机に向かう事が多くなった。学校での幸せな日常に比例するように、母親の暴力は増え続け、家庭での時間は日々陰惨たるものになっていて、執筆の時間はおるか気力すら削がれていたのだ。それに楽しい学校生活という逃避場所を見つけた

恵美にとって、小説を書く事はどうでもよくなっていたのだ。

それでも締め切りが近づき、周囲の期待もあつては、恵美も何も書かないわけにはいかず、しぶしぶノートに実のない言葉を書き綴った。

後編

放課後だった。少し蒸し暑さを残した風が、窓から吹き込んで、恵美の前髪を揺らした。締め切りは一週間を切り、恵美は焦りともどかしさを感じながらも、ぼんやりとノートの上の小説ともいえない文の羅列をなぞった。家に帰れば、酒臭い母のヒステリックな罵詈雑言に涙を流すのはわかっていて。もう少しだけ、穏やかな教室にしがみつきたかった。夕陽に染まるグラウンドの片隅に燃える火のように咲く彼岸花を意味もなく数えながら、もう少し陽が傾いたら帰ろう、あのサッカー部の練習が終わったら帰ろう、なんて思っているうちに、時計は六時を指していた。

「あれ？まだ残っていたの？」

教室の戸が音をたてて開き、知可が両手に鮮やかな彼岸花を五輪、胸の前で抱えている。知可は恵美の机の上に開いたノートを見つけ、そついう事、と笑った。

「頑張ってるわね。小説はもう出来た？」

「うっん、まだなの。白水さんは？」

「一応ね。もう少し書き足すつもりだけど」

知可は、頑張れ、と笑って、教室の隅の花瓶に彼岸花を挿した。毒々しい紅が、夕陽と溶け合って幻想的に教室を色づける。

「その花は？」

「これ？温室の横に咲いてて、綺麗だったから取ってきちゃった」

知可は肩をすくめて、温室の花は勝手に取っちゃうと部長に怒られちゃうからね、と付け足した。知可は園芸部に所属しているのだ。彼岸花を活け終わると、恵美の前の席に座って、ノートを覗きこむ。恵美は、ふわりと薫る花の匂いを感じ、知可の持つ甘い匂いは、花の香なのかもしれない、とうっとりした。

「恵美の書く話って、優しい感じがするわね。柔らかい愛に満ち溢れてる感じ」

知可は、ノートに書かれた夢物語に目を向けて優しい目をした。

「本当の恵美のお母さんも、きっと優しい人なのね」

そう付け加えられて、恵美は、自分がこの目の前の少女を騙しているような気分になって口ごもる。嘘だ、こんなの嘘だ、自分のためだけに書いた、浅ましい言葉の羅列だ、家に帰っても、死んだような、でもこの世の果てのような恨みがましい目をした自分を生んだだけの女が居るだけだ！そう叫びたくなるような鼓動を抑えて、恵美は無理やり何とも言えない苦笑を作る。しかし、次の瞬間に、それは徒労に終わった。

「どうしたの？この傷」

知可が、畏怖にも似た、触れてはいけない物に、でも触れずにはいられない、といった様に声を荒げた。しくじった、恵美はとつさにそう感じ、背筋が冷たくなるのを感じた。

恵美は普段、その傷を隠すために夏服の時は薄手のカーディガンを羽織っていた。教室の冷房が効き過ぎるからだと言って。でも放

課後は冷房が止められるので、暑さに負けてそれを脱いでしまっていたのだ。手首に残る毒々しい黒紫に盛り上がったその傷痕は、彼女自身が付けたものではなく、彼女の母親が割れた酒瓶を振り回してきた時に付けられたものであった。よりによって手首に。

「自分でやったの？」

硬直してしまった恵美の手をとって、悲痛な声が響く。恵美はその声で、もう逃げられない、どうしようもない事を悟り、涙が湧き出てくるのを止められなかった。

「違うの。これは、お母さんが……。お母さんは、本当は優しくなれないの。いつもお酒ばかり飲んで、暴力ばかり振るって……。愛された事なんてない。私、寂しくてそれでこんな話ばかり書いてたの」

やっとの事で、それを言い終えた瞬間、恵美は柔らかく温かい腕に、きつく抱きしめられていた。その体温も、優しい花の匂いも、恵美がずっと焦がれ続けていたものだった。知可は震える、でも力強い声で、大丈夫、大丈夫よ、と何度も繰り返した。

陽も暮れた頃、しばらく抱き合っていた知可は、恵美の手を握り、優しく微笑んだ。

「絶対、この事誰にも言わない。恵美の傷の事も、家族の事も。二人だけの秘密ね」

恵美は何度も頷いて、握られた手に、また涙を流した。

（私は、ここに、存在しているのだ。）

握られた手で、自分がちゃんと存在しているのがわかる。知可の

目に、自分が映っている、知可の手が私に触れている。恵美ははじめて、自分が一つの人間として生きているのを知った。

恵美は、その日のうちに、小説を書き上げた。題を『彼岸花』とした。燃えるような花に、人との繋がりが、どれほどに優しく、力強く、血縁の繋がりよりも、友情の持つ魂の繋がりが嬉しい事を託した。それは長い孤独から解放された故の、自由を持っていた。

『彼岸花』は、また佳作だった。それは、恵美にとって大した問題ではなかった。それよりも、知可の小説が大賞を取った事が嬉しかったからだ。羨望の眼差しは、美しい少女にだけ注がれた。それを妬む気持ちも微塵もなかった。恵美は、知可さえ自分を見てくれればいい、と思っていたからだ。知可は嬉しさを隠し切れないといった風に、はしゃいでいた。知可に目もくれずに。

表彰が終わった後、誰もいない教室で、配られた書評を開いた。それには入賞した五作品の一部と批評、出身校・氏名が記されていた。恵美は、誇らしい気持ちで、そこにある自分の名前と知可の名を眺めた。そして、その後、愕然とした。

（彼女はいつも陰気な影を押し隠す事もせず、その眼差しを私に向ける。私はそこに一種の気味悪さを感じながら、でも怖いもの見たさも手伝って、彼女に声をかけた）

（救いを求めるような目、それは誰からも愛された事のないそれだった。ノートに書きなぐられた絵空事は、ひたすらに愛に飢え、それは手首に付けられた傷と共に、夕暮れの中、私に投げつけられた。一体すべての原因は、どこにあるというのか。私は、その秘密を暴

いたと同時に、彼女の友人でいなければならぬだろう運命を悟った。これは正しい友情といえるだろうか。否、ただの意味のない責任である。彼女は私に救いを求めこそするが、私を救おうなんて気はこれっぽっちもない。受けられなかった無償の愛を、私と作る仮初めの友情の中で、望んでいるだけなのだから)

恵美は、呆然と目で知可の書いた文章を見つめた。秘密を暴露された裏切りよりも、そこに書かれた知可の感じたであろう事が、恵美の心を刺した。その下に載せられた自分の友愛の賛美が、全くの絵空事に思えた。彼岸花、は、いつの間にか消えていた。教室の片隅からも、グラウンドの隅からも。季節はもう十一月の寒さを持っている。それも道理だ。恵美はカーディガンを纏う必要はない。制服は冬服に変わっていた。

それでも恵美は消えた彼岸花をうつろな目で、探し続けた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9864b/>

暗い微笑

2010年10月12日00時45分発行